

〈シンポジウム／カント『人間学』の世界——開講250年を記念して〉

ヘルダーの『言語起源論』からカントの人間学講義へ

杉山 卓史

0. はじめに

本シンポジウムは、カントの人間学講義開講250周年を記念して企画・開催された。カント哲学における人間学という学科の重要性は、『イェツシェ論理学』（1800年）冒頭の有名な一節——「(1)私は何を知りうるか？ (2)私は何をなすべきか？ (3)私は何を望んでよいか？ (4)人間とは何か？」という4問に「哲学の領野」が集約され、「第一の問いには形而上学が、第二の問いには道徳が、第三の問いには宗教が、そして第四の問いには人間学が答える。しかし根本的には、これらすべてを人間学に数え入れることができよう、最初の三つの問いは最後の問いと関係するのだから」(AA, IX 25)——が示す通りである¹。しかし、1772年という年はカントのみならず、広く一般にドイツにおける近代哲学的人間学の始まりを告げる年である、とザミットは述べている(Zammito 2002, 3)²。そのメルクマールとして、彼はカントによる人間学講義の開始に加えて、プラートナーの『医者と哲学者のための人間学』およびヘルダーの『言語起源論』の出版を挙げている。

この3者のうち、カントとプラートナーの関係は、ある意味分かりやすい³。人間学講義を開始したことを告げる1773年末のヘルツ宛書簡(後述)において、カントはプラートナーの上掲書(についてのヘルツの書評)に言及し、それとは異なる自らの人間学講義の構想を述べているからである。実際の講義でも、彼我の相違に言及している⁴。

- 1 また、人間学講義筆記録を収録するアカデミー版カント全集第25巻を編集したプラントとシュタルクは、1768年のベッカーによるカントの肖像画(油彩／カンヴァス、59x46cm、シラー国立博物館蔵)においてカントが持っている本に「人間学あるいは人間の自然知(Anthropologie oder Naturkenntnis des Menschen)」と記されていることを指摘している(XXV viii Anm.; vgl. Clasen 1924; Zammito 2002, 292)。
- 2 1772年という限定こそないが、『哲学歴史辞典』(1971-2007年)の「人間学」の項でも、カント・プラートナー・ヘルダーの三者が実質的な端緒として挙げられている(Marquard 1971)。また、近年のヘルダー選集のうちの一巻も「ヘルダーと啓蒙主義の人間学」と題して『言語起源論』をはじめとする関連テキストを収録している(Herder 1987)。
- 3 たとえば浜野 2014など。
- 4 1775/76年講義録「フリートレンダー」：「人間を観察すること、人間の振る舞い、人間の現象を規則の下にもたらすこと、これが人間学の目的である。今日の諸々の人間学はみな、われわれがここでわれわれ自身にかんし有しているような理念というものを持ち合わせていない。人間の賢き振る舞いにかかわらないような一切のものは、人間学に属することはない。……プラートナーが展開してきたような、そこで理念が発生するようなものはみな思弁に属するのであって、人間学には属さない」(AA, XXV 472)。1781/82年「人間論」：「プラートナーはスコラの人間学を書いた。しかしわれわれは、もっぱら自分たちが人間について知覚する多様性から規則を引き出すということ以上の意図を持つものではない」(856)。

それに対して、ヘルダーと残り2者との関係は、必ずしも明らかではない。ここでは『日本カント研究』という場に、また、私自身の関心に鑑みて、ヘルダーとカントとの関係に焦点を当てよう。たしかに、カントとヘルダーの波瀾万丈の関係はつとに知られているが、この1772年頃には直接の交流は(いったん)消失している⁵。カントがヘルダーの『言語起源論』に言及した形跡もない。そもそも、この書には、タイトルはおろか本文でも「人間学(Anthropologie)」という名詞や「人間学的(anthropologisch)」という形容詞は一度も用いられていないのである。同書は、いかなる意味で「人間学」の(しかも、そのドイツにおける始まりを告げる)書なのだろうか。本稿では、まずこの疑問を解消することから始め、カントとヘルダーにおける「人間学」の異同を明らかにしたい。

1. 近代哲学的人間学創始の書としての『言語起源論』？

まず、『言語起源論』の形式的成立過程を確認しておこう。この書は、ベルリン・アカデミーが1769年に出した「人間はその自然的能力に委ねられて言語を発明することができるか。そして、いかなる手段によって人間はこの発明に到達するのか」(FHA, I 1274 [Kommentar])という懸賞課題に対して執筆され、一等入選を果たし懸賞を獲得した論文である。2問からなるこの課題が、前者の問いに然りと答えなければ後者の問いには答ええない構造になっていることに注意しよう。この背景には、言語の起源にかんするアカデミー内での対立、すなわち、人間起源説を唱える当時の総裁モーペルテュイと言語神授説を唱える会員ジュースミルヒとの間の対立があった。前者は、自説を後押ししてくれるような論文を求めて、このような「誘導尋問」をしたのである。

この問いを「まさに自分のために与えられたような、すぐれて偉大で真に哲学的な問い」(1769年10月末ハルトクノッホ宛書簡。HB, I 168)と歓迎したヘルダーは、もちろんこの暗黙の要求に即して論を展開している。では、言語「人間」起源論を展開したから、人間学の書なのか。そうではあるまい。そうだとすれば、人間学の始まりは、むしろ言語「人間」起源論を誘導する出題をしたモーペルテュイに帰せられてしかるべきであろう。あるいは、ヘルダーに先立って言語「人間」起源論を提唱したコンディヤック(『人間認識起源論』1746年)やルソー(『人間不平等起源論』1755年)でもよい、ということになるだろう(しかも、どちらも書名に「人間」の語を含んでいる)。

『言語起源論』におけるヘルダーは、アカデミーの暗黙の要求に即して言語「人間」起源論を直接論証するというよりも、それはある意味当然のこととして、むしろ言語「人間」起源論のヴァリエーションの中でコンディヤックおよびルソーとの相違を強調して自説の独自性を浮き彫りにすることに力点を置いている。一言で言えば、「コンディヤックは動物を人間にしてしまい、ルソーは人間を動物にしてしまった」(FHA, I 711)のである。すなわち、コンディヤックは「感性の叫びから人間の言語の起源を説明」(708)しようとしたが、それでは動物の叫び声も言語になってしまうし、裏を返せば「言葉が存在するより先に言葉がそこにあったので言葉が成立した」(710)というトートロジーになってしまう。他方、ルソーは「獣人」という仮定(これがすでに「人間を動物に

5 ヘルダーは1762年から64年までカントの下で学んだ後、64年から69年まではリガで大聖堂説教師を務め、69年から71年まではフランスをはじめとする遍歴生活を送り、71年からビュッケブルクで主任牧師の任にあった。カントとヘルダーの文通は、1768年が最後である(X 73-79 [書簡番号40, 41])。

して」いる)から始め、その状態における「自然の叫びから」言語の誕生を説く(ebd.)⁶。両者は方向性こそ異なれど、動物と人間を区別せず動物的・感情的叫び声から人間の言語の誕生を説明しようとしている点で、同じ誤りを犯している、というのである。

それに対して、ヘルダーは「動物と人間の相違に関するさまざまな知識経験から」議論を始める。それは「人間が本能の強さと確実さという点では動物たちよりはるかに劣っているということ、われわれがかなり多くの種類の動物にかんして生まれつきの技能や技能の衝動と呼んでいるものを人間はまったくもっていないということ」(711)である。人間は本能や生まれつきの技能衝動という点では他の動物に劣る「欠陥動物」である、というわけである。このような欠陥を持つにもかかわらず、人間がこの世界に生き延びることができるのは、本能の代わりに人間に「魂の自由にはたらく能動的な力」(719)が具わっているからである。それが「言語」なのだ、とヘルダーは論じていく⁷。

このように、『言語起源論』は人間を動物ではなく他ならぬ人間たらしめるものとして言語を論じている。その意味で、たしかに単に言語「人間」起源論であるということを超えて、「人間学」の書と言える。しかも、それを「動物と人間の相違に関するさまざまな知識経験から」論じているのは、「人間学」というよりも「人類学」という性格すら備えている(たとえ、それが今日の「人類学」から見ていかに未熟なものであっても)。

ザミートは『言語起源論』を近代哲学的人間学創始の書の一つと見なすに際し、同書末尾の以下の一節を引用・重視している(Zammito 2002, 344)。「筆者がむしろ努めたのは、人間の魂、人間の組織、すべての古くて未開の言語の構造、および人類の経済性全体から確実なデータを集めることであり、自分の命題を、最も確実な哲学的真理が証明されうるのと同じように証明することである」(FHA, I 810)。ここでヘルダーは、「自分の命題を、最も確実な哲学的真理が証明されうるのと同じように証明」しようと努めた、と述べている。裏を返せば、上述の「自分の命題」自体は「哲学的真理」ではなく、あくまで哲学的真理を証明する方法を借用・応用したのだ、ということになる(ハルトクノッホ宛書簡ではアカデミーの課題を「真に哲学的な問い」と評していたにもかかわらず)。「確実なデータを集める」ことに努めた、という経験的方法への自覚も同様の文脈にあるし、「すべての古くて未開の言語の構造」からそうした、というのは、直接的には『言語起源論』を振り返ってのことであるが、後にライフワークとなる民謡(Volkslieder)収集のマニフェストとしても読める。『言語起源論』は、著者本人の意識では、哲学とは別の経験的な学科の書であった。それが「人間学」である、ということになるのか。

しかし、ザミートの論述において『言語起源論』の占める割合は、これを人間学の始まりと比定するそのテーゼに比して、驚くほど少ない。むしろ分量的には、それに先立つ1760年代末の、「今日のヘルダー研究が彼の成熟した思想にとって決定的と認識する」諸論考——『旅日記』、第四『批判論叢』、「触覚という感官について」など——が重点的に考察され、「これらすべての結晶化した洞察の公的な果実」として『言語起源論』を位置づけている(Zammito 2002, 309)。上述の諸テクストがその生前には公にされなかった「遺稿」であるのに対して、『言語起源論』は公刊著作で

6 なお、この文脈でヘルダーはモーベルテュイをも「言語の起源を動物的な音から分離させてしまい、ルソーと同じ道をたどっている」(710f.)と批判している。それでもなお最優秀と評したモーベルテュイの度量に驚かされる。

7 この論証にかんしては杉山 2006参照。

ある(しかも、アカデミーがお墨付きを与えた)という形式以上の意味を見出すのは難しいように思われる。

以下では、ヘルダーの「哲学とは別の経験的な学科」の構想を1760年代に遡って見ることにしたい。それを見る上で格好のテキストが、「哲学を人間学に回収すること (Einziehung der Philosophie auf Anthropologie)」というフレーズを含む遺稿「いかにして哲学は民衆のためにより普遍的かつ有用なものになりうるか」(1765年執筆)である⁸。

2. 「哲学を人間学に回収すること」

——哲学を民衆にとって普遍化・有用化するために

このテキストも、もともとはベルンの「愛国者協会」が1763年に出した懸賞課題「いかにして哲学の真理は民衆のためにより普遍的で有用なものになりうるか」⁹に依って書かれた、しかし完成・応募されることはなかったものである。結論から言えば、この問いに対する答えが「哲学を人間学に回収すること」なのだが、そこに至る行論を少し追うことにしたい。

このテキスト(ないし懸賞課題)で注目すべきは、「民衆のため(zum Besten des Volks)」という点である。ここでの「民衆」は、一貫して「学者(Gelehrte)」ないし「哲学者」との対比で用いられている。特徴的な一節を引用しよう。「学者の思考は学者のためだけである……民衆は哲学者になる必要はない、そうなったら民衆ではなくなるのだから。それは民衆にとって害であり、民衆は導きを求めている——哲学による——すなわち、健全な悟性の論理学」(FHA, I 114)。このように、専門家にとってではなく一般大衆にとって哲学を普遍化・有用化する、一種の「教育プログラム」として、「われわれの哲学には長いこと教育計画が欠けていた」(131)という問題意識から、このテキストは書かれている。実際、本文の前にかなり細かくアウトライン化された「構想(Anlage)」が置かれている(101-103)が、これは前述の『旅日記』にも通じる(vgl. IX/2 52; 64-66)、一種の教育プログラムとみなすことができ、「教育者ヘルダー」の面目躍如である。

はじめにヘルダーは、「哲学と数学との内的争いはどこから来るのか?それはいかにして調停されうるのか?哲学に数学的确实性、明証性そして有用性を求めるために、ある学問は別の学問と比べられうるのか?ある学問は他の学問に、両者の統合から経験した損害を被ることなく、流れ込むことができるのか?」(I 106)と、哲学の普遍性・有用性を数学と比較しつつ問題提起する。ここには明らかに、数学の方法と哲学のそれとの相違を強調したカントの『判明性』論文(1764年)の影響が見られる。以上の導入に続いて、ヘルダーは論理学の現状に批判の目を向ける。

われわれの論理学における長所をつぶさに見るなら、それは心理学のきわめて不当に分離された一部でしかないように思われる。それは形而上学として扱われねばならず、決して道具的知として前提されてはならない。われわれの論理学は、これをわれわれの魂の切り刻まれ

8 もちろんザミートもこのテキストを重視しているが、『言語起源論』と関連づけてはいない。関連づけたものとしてはIrmischer 2001があるが、人間学という視点からではなく、概説書という性格のため掘り下げたものでもない。

9 この課題は、レッシング・メンデルスゾーン・ニコライが創刊した雑誌『現代文学にかんする書簡』第16号(Lessing, Mendelssohn und Nicolai 1759-65, XVI 139)にも掲載されている。

た一部として、屍に満ちた領野として見ようとするのでなければ、心理学の大部分を前提する。……しかし、われわれの論理学は、有益であろうとするならば、心理学の精髓と結びついていなければならない。要するに、私は四肢を身体に戻そうとしたのだ。(111f.)

ここでヘルダーは、細分化・道具化された論理学を「心理学」化することを提唱している¹⁰。比喩的に「四肢を身体[全体]に戻そうとした」とも述べている。

そして、そのような「民衆のための哲学の基盤としての心理学化された論理学」——上述の「健全な悟性の論理学」——のモデルを「われわれの愛国的な人類の友たるルソー」に求め、「彼の偉大な主題は、私の主題ときわめて密接に関連している」(FHA, I 114)とシンパシーを寄せている。このようにして、哲学を民衆のためにより普遍的で有用なものにするプログラムの核・結論として「哲学を人間学に回収すること」を挙げている。「回収(Einziehung)」は「教育(Erziehung)」との語呂合わせと見ることもできよう。このような自らのプログラムを、ヘルダーは「プトレマイオスの体系からコペルニクスの体系になったように」(134)と形容している。カントに先立つ「コペルニクスの転回」とまで言うのは(『日本カント研究』という場では)過言かもしれないが、ヘルダーの自信のほどが窺えよう¹¹。

ヘルダー自身は、このテキストの中で「人間学」について詳細な説明を与えてはいないが、おおよそ以上の素描から浮かび上がってくるであろう。すなわち、心理学を基盤に人間を全体として見る^{ホーリスティック}全体論的な、「健全な悟性(=常識)」の論理学である。

3. バウムガルテンの「人間学」からの逸脱

ところで、こうしたヘルダーの「人間学」の理解は、何に由来するのか。もちろん、哲学と数学との比較といい、ルソーへのシンパシーといい、この直前まで直にその下で学んでいたカントをまずは想定すべきであろう。しかしここでは、カントを超えてバウムガルテンを参照することを提案したい。なぜなら、バウムガルテンは『形而上学』(1739年)において次のようにして「人間学」に言及しているからである。

人間の魂は延長されたものの三次元を許容しないが、それでも人間の魂についての哲学のおよび数学的認識は、人間の身体についての哲学のおよび数学的認識と同様に、可能である。人間は有限な魂と有限な身体とからなり、したがって内的に変化しうるものであり、有限かつ偶然的な存在である。それゆえ、人間についての哲学のおよび数学的認識は可能であり、それが哲学的人間学(anthropologia)と数学的人間学あるいは人間測定術(anthropometria)である、ちょうど人間についての経験的認識が経験によって可能になると同様に。人間を認識する際に観察されうる規則の総体は、人間認識論(anthropognosia)である。(MT,

10 ザミートは、その背景にフェーダーとマイナスに代表される「ゲッティンゲン・プログラム」を想定している(Zammito 2002, 245-250)。また、18世紀の美学の成立の背景に論理学と心理学の結びつき(心理主義的論理学)があったことを指摘する論考として、桑原 2019がある。

11 しかし、Heise 1998は、このフレーズへの注目からヘルダー思想全体への導入を始めている。

§747)

ここで「人間学」は、(人間の有限な)「魂」と「身体」および「哲学的認識」と「数学的認識」という、二組の対概念の交叉するところで語られている。後者の対概念が「いかにして哲学は～」にも流れ込んでいることは、すでに見た。前者の対概念は、端的に「心身問題」であり、バウムガルテンは魂だけでなく身体だけでもない、両者の合一体としての人間についての認識を「人間学」と見ている。時期は前後するが、プラートナーが『医者と哲学者のための人間学』において示す「人間学」、
「身体と魂の相互関係、制限そして協働関係[についての考察]」(Platner 1772, xvii)と、まったく同じである¹²。ここに、18世紀半ばのドイツ語圏における「人間学」の標準的な理解＝心身問題についての考察、がある。

しかし、ここで注目したいのは、この「人間学」を規定する §747が置かれた位置である。(後にカントが人間学講義の教科書とした「経験的心理学」章 §§504-739ではなく)「合理的心理学」章冒頭の「人間の魂の本性」節に置かれているのである。カントとヘルダーそれぞれの「人間学」は、ここからの「逸脱」として特徴づけることができよう。

分かりやすいのはヘルダーの方であろう。バウムガルテンの「合理的心理学」は、上述の人間学についての規定を含む「人間の魂の本性」 (§§740-760)に続き、「心理学の体系」 (§§761-769)「人間の魂の起源」 (§§770-775)「人間の魂の不死性」 (§§776-781)「死後の状態」 (§§782-791)について順次論じていくが、その後、わずか4§ (§§792-795)ながら「動物の魂」についても触れている¹³。『言語起源論』へと至る若きヘルダーは、この動物の魂と人間のそれとの比較という合理的心理学の主題を「より身近な経験から導き出す」 (§503)という経験的心理学の方法によって展開した(それによって同時に言語の発生を説明した)、と言える。

また「いかにして哲学は～」に戻ると、バウムガルテンその人が創設した「美学」にヘルダーは特段の注目を寄せ、「美しく思考することを学べ」(FHA, I 131)というスローガンを掲げている。バウムガルテンは「経験的心理学」章において「美学」を「感性的に認識することと叙述することについての学」と規定したが、それを「美しく思考する技術(ars pulcre cogitandi)」(MT, §533)とも補完的に規定しており¹⁴、ヘルダーはこれを踏まえている。「哲学を人間学に回収すること」は、厳密な論理的思考とは異なる「美しく思考する技術」たる美学があつてこそ可能になる——極論すれば、人間学は必然的に美学となる——とヘルダーは期待したのであろう¹⁵。数年後(第四『批判論叢』等において)、「バウムガルテン流の」美学は徹底的に批判される¹⁶が、美学そのものへの期待は『言語起源論』においても¹⁷それ以後も、減じることはない。さらに、それを「女性の学びの計画」としていることは、フェミニスト的関心から注目に値するところであろう¹⁸。

12 ただし、プラートナー自身はバウムガルテンの影響を否定している(vgl. §88)。

13 目次では「心理学の体系」は「身体との交通」、「動物の魂」は後続の「人間以外の有限な精霊」 (§§796-799)とともに「人間以外の魂との比較」とされている。

14 これらの規定は、その後『美学』(1750/58年)にも引き継がれる。

15 後述する「ヘルダー形而上学」にも、『形而上学』§533に対応する箇所に「美学は論理学より有益で趣味に即している」(AA, XXVIII 59)という記述がある。

16 Vgl. Menke 2017.

17 「私がここでどうしてもあきらめきれないものがあるとしたら、それは人間の魂の内部での言語の発生点から論理学、美学そして心理学へと……進んでいく、さまざまな展望である」(FHA, I 732)。

このように、(バウムガルテンの体系では)合理的心理学の主題を経験的心理学の方法で論じる学科、それがヘルダーにとっての人間学であった。それに対して、カントはどうであろうか。合理的心理学を「誤謬推理」と切って捨てた批判期カントならば、そこに含まれる人間学という学科そのものを同時に葬り去ったとしても不思議ではない。しかも、その萌芽はすでにこの時期『視霊者の夢』(1766年)において示されている¹⁹。

改めて、人間学講義を開始したことを告げる1773年末のヘルツ宛書簡の該当部分を繕いてみよう。

プラートナーの『人間学』にたいする書評を読みました。……この冬は人間学の二回目の私講義を行います、私はこの講義を大学の正式の科目にしようと今考えています。ただし、私の計画はまったく異なります。私の意図は、人間学によってすべての学問の源泉を、道徳、熟練、社交、そして人間を形成し統御する方法などの源泉を開き示すこと、つまりは、すべての実践的なものの源泉を開き示すことです。そのさいに私は、人間の自然本性一般がさまざまに変様する可能性のもとをなす第一根拠よりも、現象とその法則の方を探し求めます。したがって、身体器官はどのように思考と結びついているのかという、微細な、私から見れば永遠に不毛な探求は、まったく行いません。(AA, X 145f.)

カントは「私の計画はまったく異なります(Mein Plan ist ganz anders)」と伝えているが、「何と」異なるのだろうか。素直に読めば、直前で言及されているプラートナーの『人間学』であろう²⁰。後段でカントが否定する「人間の自然本性一般がさまざまに変様する可能性のもとをなす第一根拠」や「身体器官はどのように思考と結びついているのかという……不毛な探求」とも矛盾しない。しかし、それならバウムガルテンの合理的心理学とて該当する。実際、その講義で教科書としたのは、その前に位置する「経験的心理学」だったのである。カントが行ったのは、「すべての実践的なものの源泉」という「内容」を、「経験的心理学」という「方法」によって、「人間学」という「看板」の下に論じるという、かなり大がかりな学の再編成だったのではないだろうか。そして、この点にヘルダーとの異同も存する。「経験的心理学」という「方法」によって、「人間学」という「看板」の下に論じるという点は同じだが、肝心の「内容」がまったく異なるのである。

以上のようにバウムガルテンを参照点として、カントとヘルダー(さらにはプラートナー)それぞれの人間学の相違を特徴づけることができるが、それにしても問題は、「すべての実践的なものの源泉」を「内容」とする学科の「看板」が、なぜ「人間学」であった(なければならなかった)のか、である。残念ながら、この問いに対する答えを私は持ち合わせていない。ザミートとともに「カ

18 この主題は、バウムガルテンが匿名で発刊した週刊雑誌『アレオフィルスの哲学書簡』(1741年)に端を発し、ヘルダーはこの後も『旅日記』等において同様の計画を述べている(FHA, IX/2 35)他、後に妻となるカロリーネと書簡において意見交換したりもしている(HB, I 221f.)。研究はなお萌芽段階であるが、Klinger 2016などがある。

19 ヘルダーは同書の書評において「常に人間に即して(κατ' ἀνθρώπων)哲学するという幸福な分析の道を行く著者」(FHA, VIII 1074)と述べている。これに注目したものととして杉山 2015を参照。

20 たとえば、プラントとシュタルク(AA, XXV vii)。Zammito 2002, 295も“my plan is entirely different [from Platner's]”と「プラートナーの」を補って訳出している(ケンブリッジ版著作集のZweig訳では“my plan is quite unique” [Kant 1999, 141]である)。

ントの人間学はその言説の範型(paradigm)ではなく、そこからの意図的な逸脱である」(Zammito 2002, 347)と言う他ないのかもしれない。ここではただ、次のことを指摘するにとどめたい。すなわち、「看板の付け替え」をカントは他所でもしている、ということである。そして、それにもバウムガルテンが絡んでいる。彼が創始した「美学(Ästhetik)」を、カントは「誤った希望」「無駄」と切って捨て、代わりにこの語を「感性のアプリオリな原理すべてについての学」=「(超越論的)感性論」の「看板」とした(KrV, A21 = B35)²¹。公刊著作でその理由を説明しているか否かという相違(そして、その理由に説得力があるかという問題)はあるが、これとの類推で人間学講義の「看板の付け替え」を考えてみることはできよう。そしてそれは、ヘルダーが「哲学を人間学に回収すること」において美学に期待を寄せたのと対照的である。

4. 形而上学と人間学の関係——「ヘルダー形而上学」から『イェッシェ論理学』へ

ここで、以上のようなバウムガルテンを参照点としたカントとヘルダーの異同を見るのに好適な、ヘルダー自身によるカントの形而上学講義の筆記録(「ヘルダー形而上学」)に言及しておこう。これは、アカデミー版カント全集第28巻に収録されたカントの形而上学講義筆記録中最も早く、(他の筆記録の年代同定次第ではあるが)おそらくは1772年の人間学講義開始以前(=バウムガルテンの『形而上学』を教科書とする講義が形而上学のみだった時期)の唯一の筆記録である。また形式的には、カントにおいて「教科書」は多くの場合、ほとんど名ばかりの、「話の糸口」程度の存在にすぎなかったが、「ヘルダー形而上学」はかなり教科書に忠実な、逐条解釈的なノートになっていることが注目される。

何より重要なのは、人間学講義が始まる1772年以前のカントのテキスト(厳密に言えばカント自身の筆によるのではないが)の中で唯一、この筆記録において「人間学」という語が次のような文脈で登場するからである。

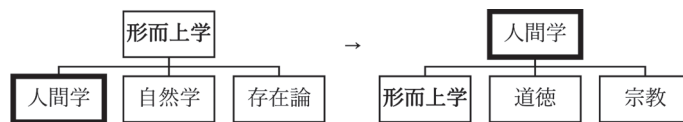
[自然神学は] 1)その知性の自然な歩みに即して、神の概念をあらゆる民族が共有するものとして、それが正しいかを問うことなく把握することへと高まっていく場合は、主観的である。

2)神の真の理念が真に知性から流れ出して人間がそこに到達すべきであり、この証明が神の証言からではなく(この認識は、たとえそれが非常に真であろうとも、歴史的であるが哲学的ではない)理性からなされる場合は、客観的である。これは形而上学に属する、なぜなら、自らの内に次のものをもつからである。

1)人間学、2)自然学(Physik)、3)存在論、(しかし、この先は何よりも)4)あらゆる事物の起源。神と世界。すなわち神学——究極の实在根拠であり、最高の形而上学である。(AA, XXVIII 126; vgl. 911)

21 ただし、カントからすればバウムガルテンの方が「他国民が趣味の批判と呼んでいるもの」にÄsthetikという看板を付け替えた「張本人」である。

そもそも「自然神学」をめぐる文脈で「人間学」が登場することが奇異に感じられるところであり、ヘルダーの「解釈」が多分に入った筆記録ではある。しかし、「人間」と「自然」の「存在」を「最高の形而上学」としての「(自然)神学」が続べる、と解せば、少なくとも形而上学の体系をめぐる記述として筋は通る。これを、はじめに引用した『イェッシエ論理学』の記述(これまたカント自身ではなく弟子が編集したものだが)と照らし合わせてみると、興味深い。どちらも哲学の4学科の関係を述べたものだが、自然学の有無等の相違は別として、人間学と形而上学の位置が完全に入れ替わっているのである(下図参照)。「形而上学中の人間学」から「人間学中の形而上学」へ、これが、カントの30年余りの哲学者人生において起きた変化である。後者の位置づけを額面通りに受け取ることには慎重であるべきかもしれない²²が、開講期間や回数では上回る論理学や形而上学そして自然地理学を差し置いて人間学講義を自ら編集し『実用的見地における人間学』(1798年、以下『実用的人間学』)として出版したという事実が、この位置づけを裏づけている、と私は見たい。



5. ヘルダーの見た『実用的人間学』——むすびに代えて

最後に、一部はすでに拙稿(杉山 2005; Sugiyama 2017)において指摘したことはあるが、この『実用的人間学』がヘルダーの目にどう映ったのかを見ておくことで、カントの人間学(そのものではなく、その周囲)をめぐる散漫な考察を閉じることにしよう。

一つは『純粹理性批判のメタクリティーク』(1799年)。この『純粹理性批判』批判の書の第一部「悟性と経験」において、二度『実用的人間学』は引かれる。それぞれ「魔女(Hexe)」(FHA, VIII 306Anm. / AA, VII 151Anm.)および「予感する(ahnen)」(FHA, VIII 480f.Anm. / AA, VII 187)という語の起源をめぐる論述への批判であり、「言語なき理性批判」への批判という同書の性格をよく表しているが、逆に言えば、『純粹理性批判』にはない言語(哲学的考察が『実用的人間学』にはある、と(相対的に)評価しているとも言える。ただし、「魔女」にかんしてはヘルダー自身の語源説明も今日の研究では誤りとされており(vgl. FHA, VIII 1143 [Kommentar])、カント批判として有効ではない(『メタクリティーク』全体がカント批判として有効ではない)という評価には与しない)。むしろ、ここで注目したいのは、直接的には『実用的人間学』を念頭に置いたものではない、以下の一節である。

たしかにわれわれは、人間理性を思考と言葉においてある種の目的のために、われわれの本

22 「批判期カントは、人間学という学科の野心の果実に反するような仕方人間学を形而上学の下に位置づけた」(Zammito 2002, 3)

性の他の能力から分離しうる。しかし、それが他の能力から分離して自存するのではないことを、忘れてはならない。思考し意志し、理解し感覚し、理性を訓練し欲求するのは、同一の魂である。(319)

ここでヘルダーは、本来全体として相互連関の内に見るべき各認識能力をカントが個別に切り離して考察していることを批判しているが、これは「いかにして哲学は～」における「四肢を身体[全体]に戻すこと」と通底するものであり、『メタクリティーク』は『純粹理性批判』への「人間学的」批判とも言えるのである。

もう一つは、翌1800年の『判断力批判』批判の『カリゴネー』。ヘルダーは「世界は全体として偉大な天才の格別な貢献によるものなのか……、あるいは、たとえ画期的ではないにせよ、機械的な頭脳が経験という杖に即してゆっくりと前進する平凡な悟性によって技術と科学の発展の多くに貢献してきたのか……、という問題は、ここでは保留しておこう」という『実用的人間学』の一節(AA, VII 226)を引用し、これに次のようなコメントを付している。

世界の歴史がこのことを十分に解明している。あらゆる進歩、そして科学と技術のあらゆる起源やその調和および秩序は言うまでもないが、これらを人間性が獲得しえたのは、[経験という]杖に即した平凡な歩みではなく、目を見張るような天才のおかげである。(FHA, VIII 834)

これは、カントに対する批判といえは批判ではあるが、ヘルダーはその主張が誤りである、と言っているわけではなく、カントがその選択を保留した二つの選択肢のうちの前者を自分は選択する、と言っているにすぎない。世界の発展に堪してカントが提示している二つの選択肢のうち、その主要因を天才とみなす前者は前批判期のカントのものであり、それに対して機械的な頭脳すなわち理性とみなす後者は批判期の啓蒙主義的なものであるとみなすことができようが、その両者が批判期においても同居していることを、ヘルダーは鋭く、そして前者への回帰を求めながら、指摘しているのである。

このように見るなら、カントの人間学は「批判哲学完成後も否定されざる前批判期の残滓」と言えるかもしれない。

文献表(引用略号)

- Baumgarten, Alexander Gottlieb, 2001 (¹1739). *Metaphysica = Metaphysik. Historisch-kritische Ausgabe*. Übers. und hg. von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog. (MT, §番号. 訳出に際して「バウムガルテン『形而上学』(第四版)「経験の心理学」訳註—その1—」樋笠勝士・井奥陽子・津田栞里訳『成城文藝』第233・234合併号、2015年、53-73頁を参照した)
- Herder, Johann Gottfried Herder, 1977-2016. *Briefe. Gesamtausgabe*. 18 Bde.. Hg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar (Goethe- und Schiller-Archiv). Weimar: Bölaus Nachfolger. (HB, 巻数[ローマ数字]・頁数[アラビア数字])
- 1985-2000. *Werke in zehn Bänden*. Hg. von Günther Arnold et al., Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker. (FHA, 巻数[ローマ数字]・頁数[アラビア数字]. 訳出に際して『言語起源論』宮谷尚実訳、講談社学術文庫、2017年を参照した)
- 1987. *Herder und die Anthropologie der Aufklärung (Werke Bd. II)*. Hg. von Wolfgang Proß. München: Hanser.
- Kant, Immanuel, 1902-. *Gesammelte Schriften*. Hg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin: Gruyter. (AA, 巻数[ローマ数字]・頁数[アラビア数字]. 訳出に際して『カント全集』全22巻、岩波書店、1999-2006年を参照した)
- 1998. *Kritik der reinen Vernunft*. Hg. von Jens Timmermann. Hamburg: Meiner. (KrV, 原著第1版の頁数[A]・第2版の頁数[B])
- 1999. *Correspondence*. Trans. and ed. by Arnulf Zweig. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lessing, Gotthold Ephraim, Mendelssohn, Moses, und Nicolai, Friedrich, hg. 1759-65. *Briefe, die neueste Literatur betreffend*. Berlin.
- Platner, Ernst, 1772. *Anthropologie für Ärzte und Weltweise*. Leipzig.
- Clasen, Karl-Heinz, 1924. *Kant-Bildnisse*. Königsberg i. Pr.: Gräfe und Unzer.
- 浜野喬士 2014. 「フィヒテの動物論と18世紀人間学：プラトナー、カント、フィヒテ」『フィヒテ研究』第22号、96-111頁。
- Heise, Jens, 1998. *Johann Gottfried Herder. Zur Einführung*. Hamburg: Junius.
- Irmscher, Hans Dietrich, 2001. *Johann Gottfried Herder*. Stuttgart: Reclam.
- Klinger, Cornelia, 2016. „schön denken ...: Herders Plan zu einer Frauenzimmer-Ästhetik“. In: *Herder und die Klassische Deutsche Philosophie*. Hg. von Dieter Hüning, Gideon Stiening und Violetta Stolz. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, SS. 349-374.
- 桑原俊介 2019. 「論理学における心理主義と美学の成立」『美学』第70巻第2号、13-24頁。
- Marquard, Odo, 1971. Art. „Anthropologie“. In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Hg. von Joachim Ritter. Basel: Schwabe, Bd. I, SS. 362-374.
- Menke, Christoph, 2017 (¹2008). *Kraft. Ein Grundbegriff ästhetischer Anthropologie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp (2022. 『力 美的人間学の根本概念』杉山卓史・中村徳仁・吉田敬介訳、人文書院).
- 杉山卓史 2005. 「『カリゴネー』におけるヘルダーのカント批判の意味するもの—カント趣味論研究への一視点—」『京都美学美術史学』第4号、2005年、157-86頁。
- 2006. 「ヘルダーの共通感覚論—共感覚概念の誕生—」『美学』第57巻第1号、1-14頁。
- 2015. 「「われ感ず、ゆえにわれ在り」のヘルダーにおける成立」『美学』第246号、2015年、53-64頁。
- Sugiyama, Takashi, 2017. “What Kind of Sensorium commune Are We? Herder after Merleau-Ponty.” In: *Proceedings of the 20th International Congress of Aesthetics*. pp. 465-68.
- Zammito, John H., 2002. *Kant, Herder, and the Birth of Anthropology*. Chicago (MA): University of Chicago Press.

※本研究はJSPS科研費JP18K00126およびJP22K00141の助成を受けたものです。